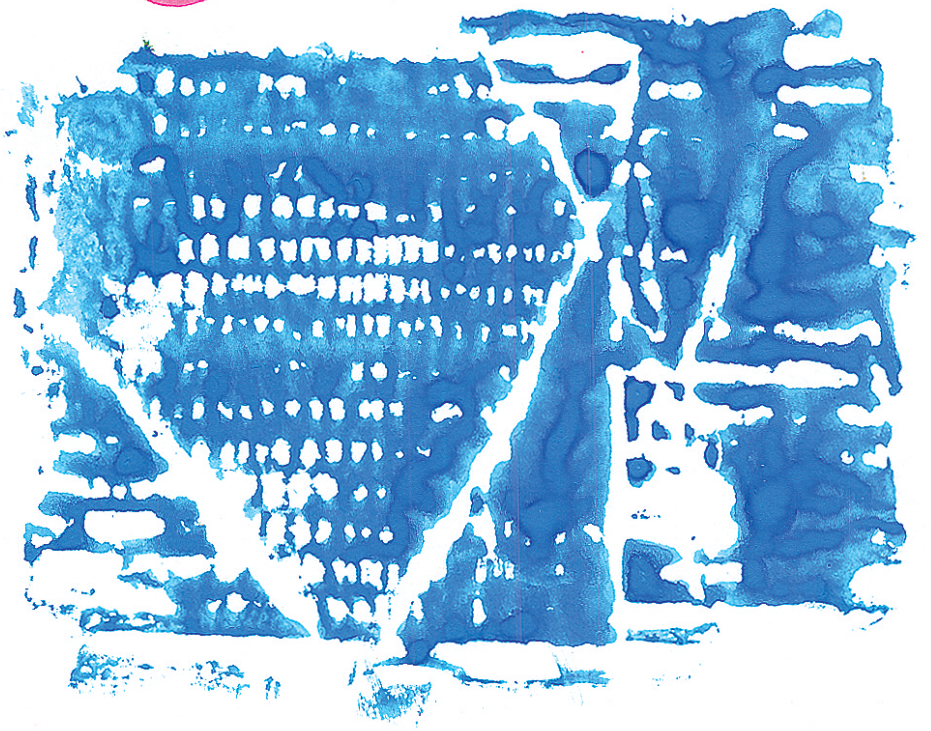
言の葉倶楽部

ことのはくらぶ



kotonoha club- Ⅱ Vol.8 2012.3.30

言の葉倶楽部・Ⅱ　第八号　目次

エッセイ◉再び吉本隆明氏への手紙　高橋英司　2
エッセイ◉白餡饅頭　尾崎まりえ　6
エッセイ◉螢君、よかったですね。　岩井　哲　10
箴言◉ぐうたら草　第百二段～第百十八段　菊地隆三　14
論考◉〝象徴〟への航海（二）　鎌上　宏　22
詩◉永遠の夏・他　大江利知　30
詩◉おでこ　尾崎まりえ　38

再び吉本隆明氏への手紙

◎高橋英司

正月気分も覚めやらぬ中、十数年ぶりにお便りいたします。前回お便りしたのは、一九九六年、吉本さんが海水浴場で溺死しかかって、一命を取り留めた折のことでした。あの時は、TVに事故のニュースが流れ、重体の報を受けた私たち（私だけではないはずです）は、これで一つの時代が終わった、というような衝撃を受け、呆然とした憶えがあります。その後回復され、最近は足腰が弱っているとの噂も耳にしましたが、新聞その他での発言・批評活動を目にするにつけ、年齢を感じさせぬ旺盛な筆力に、改めて畏敬の念を抱いております。また、最近刊行されたユニークな和綴じ本の「Kototoi」創刊号にも、吉本隆明の名を執筆者の顔ぶれとして発見し、現物を見もせず、迷わず、直ちに購読申し込みをしたことも、私には記憶に新しいところです。

今回、突然筆を執ったのは、この正月、積読状態のいろいろな雑誌等の山を崩しながら、ざーっと頁を捲り目を通していたところ、吉本隆明は原発推進派だ、という批判を受けている文章を数件目にしたからです。えっ、と驚きました。八〇年代の反核運動に対して批判的であったことは知っておりましたが、昨年来の、福島第一原発事故発生の最中に、まさか、原発賛成の発言をするとは思えなかったからです。そこで、事実を確かめるために、急いでネット検索をしてみました。すると、吉本さんの発言は、八月五日付日本経済新聞のインタビュー記事のようだと分かりました。引用してみたいと思います。

「原発をやめる、という選択は考えられない。原子力の問題は、原理的には人間の皮膚や硬いものを透過する放射線を産業利用するまでに科学が発達を遂げてしまった、という点にある。燃料としては桁違いに安いが、そのかわり、使い方を間違えると大変な危険を伴う。しかし、発達してしまった科学を後戻りさせるという選択はあり得ない。それは、人類をやめろ、というのと同じです。

だから危険な場所まで科学を発達させたことを人類の知恵が生み出した原罪と考えて、科学者と現場スタッフの知恵を集め、お金をかけて完璧な防禦装置をつくる以外に方法はない。今回のように危険性を知らせない、とか安全面で不注意があるというのは論外です」

科学の発達は止められない、後戻りはできないという見解だと思います。それはその通りだろう、と私も理解します。反核運動の時、そんな運動は無意味だ、仮に核廃絶が実現しても、国家間の紛争が生じた場合、いったんストップした核開発を再開することになるのだから、一時的な自己満足にすぎない、と批判されたのだったと思います。日本も含め潜在的な核保有国はざらに存在するわけですから、実質的な意味を持たないパフォーマンスにすぎない、というわけです。しかし、後半部分の「科学者と現場スタッフの知恵を集め、お金をかけて完璧な防禦装置をつくる以外に方法はない」という見解は、どうなのでしょうか。現段階で、原子力を完全に制御することは可能なのでしょうか。現実に事故が発生して、多くの人はこの点に疑問を抱いているのだと思います。人間が行うことですから、過ちが生じる可能性はあります。完璧な防禦システムに見えても、それこそ想定外の事態が発生することもあると思います。楽観的な考え方は許されないような気もします。科学的知見とその応用技術は別の問題だとも考えます。危ない橋は渡らない、というのが人間の知恵ではないかとも、私は考えます。

あり得るかもしれない、あるいは、あり得ないかもしれないリスクに直面した時、どちら側に立つかの分水嶺のような場所で、残念ながら、吉本さんとは意見を異にしてしまいました。吉本さんを耄碌したなどと悪態をつく批評家もいるようですが、私はそうは思いません。大正十三年生まれ、八十七歳、身体に不自由はあっても、頭の中は明晰そのものだと思います。憶測するに、理系的人間は、科学技術に対する信頼が文系的人間よりも強いことが、判断の分かれ目になっているようにも感じています。以上が、今回お伝えしたかった事柄です。敬愛する吉本さんに申し上げるのもおこがましいのですが、再考をお願いしたいと思います。

ついでながら、紙幅がまだ残っておりますので、少し雑談をしたいと思います。

この正月、私は、新潮文庫版の『悪人正機』を拾い読みしました。「ほぼ日刊イトイ新聞」の糸井重里さんによるインタビューをまとめた軽い読み物でした。一頁目から順序良く読み進むのではなく、興味・関心の向くテーマの順に、気楽に読みました。そんな本だったのですが、中学生に読んでほしいと望んでおいでとはいえ、内容的にはかなり重要なテーマが縷々述べられていました。

その中に、「『正義』ってなんだ！」の項があって、吉本さんは、「自分だけがストイックな方向に突き進んでいくぶんにはかまわないんですけど、突き詰めていけばいくほど、他人がそうじゃないことが気にくわね

えってのが拡大していきましてね。そのうち、こりゃかなわねえってなことになるわけですよ」と言っています。例として、「清貧の思想」を挙げ、そういうものはダメなんだと言い切っています。これは全く共感する部分でした。法律に任せきったような正義や、誰も正面から反対できないような正義がまかり通る風潮に水を差す。そのような考え方こそが、私が吉本信奉者になった大きな理由でしたので、思わず膝を打ちました。

『清貧の思想』は、小説家・故・中野孝次の著書で、九二年（平成四年）にはベストセラーになったことを記憶しています。バブル景気によるカネ・モノの豊かさは本当の豊かさではない、心の豊かさが大事だと訴えた内容でした。当たり前の内容なのですが、バブルに対する反省から、爆発的にヒットしました。当時、私は、中野孝次の小説『麦熟るる日に』なども読んでいて、私は中野の教養主義的な成長物語のファンでもありました。良書の見本のような本を書く作家だと認識しています。また中野孝次は反核運動の発起人でもありました。良心の塊のような真面目な人だったのだと思います。それが、吉本さんからは、ばっさりやられます。反核運動にしろ、清貧の思想にしろ、誰からも非難や批判を受けずに済む正義です。これに反対したり、賛同しない者は変な目で見られる。下手をすると、社会ファシズムになると吉本さんは考えたのだと思います。ボランティア活動云々も同じく、隠された強制や抑圧につながったならばファシズムであると私も思います。

自分を正しいと思いこんでいる人たちは、異を唱える人たちが癪に障り、目障りで仕方がない。これが拡大していくと、イジメになったり、テロになったりするのだと思います。概して原理主義者に多く見られるように感じ、胡散臭く危険な印象は避けられません。吉本さんが、正しいことを照れもせず大きな声で言う奴は疑った方がよい、という意味のことを、かつて言っていたことを思い出しました。

人間を優等生的に型にはめ込もうとする考え方に、私は激しく抵抗します。人間はそんなふうには生きられないと思います。遊んだり、贅沢をしたり、博打をしたり、清貧の対極にあるものを否定することはできません。根本的な人間理解が違うのだと考えます。こういう感覚においては、私は吉本イズムを受け継いでいると自負しております。

ところが、国際政治の場で、何かとアメリカがしゃしゃり出てくることについて、吉本さんは、「アメリカの正義は主観的なおせっかいだ」と言う一方で、紛争当事国や近隣諸国の間で片付けられないから、アメリカが介入することになるのには、少しシンパシーがあると言っています。おせっかいではあるけれども、ア

メリカ流のヒューマニズムで事を収めるのは避けられない、と極めて実際的なことも言っています。この点では現実主義者だとお見受けしました。

話は変わりますが、吉本さんの家では、常にＴＶをつけっぱなしにしているようなのですね。「『テレビ』ってなんだ！」の項によると、一般的な老人家庭と同じような様子なので、安心というか親しみを感じました。そして、スポーツ、タモリの昼の番組をはじめ、いくら自由業とはいえ、一般人よりもＴＶ視聴時間が長いように見受けられます。特に、『魔女の条件』（一九九九年・ＴＢＳ・全一一話）がおもしれえや、と言っていたのに目を止めました。吉本さんが、松嶋菜々子主演のＴＶドラマを見ている図は、全く予想外でした。そして、ＴＶを見るのはさみしいからなんだそうですね。また、ＴＶ出演を断ってきたのは、「人相が悪いから」だそうですね。確かに、顔を見られる心配のない本の読者とＴＶの視聴者では桁違いの数ですから、責任は持てないし、大誤解が生れるのが面倒だとも言っています。一度、『電波少年』に出演したことがあるようですが、私もＴＶは止した方がよいと思います。知の巨人、天下の吉本隆明が、くだらないクイズ番組の解答者になったり、グルメ番組に出てきたら、笑えるどころか、悲しくなってしまいます。

最後に、「Ｊ文学」はパートの文学だ、という視点を面白いと思いました。確かに、純文学とエンタメ文学の境界が消滅してしまって久しいと思いますし、作品で成長の跡をたどれるような作家は、村上龍、村上春樹で終わり、というのも宜なるかなです。その都度その都度の着想で作品が生まれて行くのは、時間給でやっているような感じだから、パートタイム文学、それでかまわないんだ、と。今や、かつての純文学などは、文学界のゴミ箱に僅かに残っているだけです。時代が大きく変わったのだと、私も感じております。

何やかやと余計なことを書いてしまいました。ただ単に、原発推進に手を貸すことのないようにと願って、信奉者の一人として釘を刺したく、伝えるべきことは伝えなければならないと思いました。この原発問題以外では、私は完全に吉本信者ですから、少々残念だったのです。それでも、ほんとのことを、はっきり仰る吉本さんは、素晴らしいと思います。いい加減なことを言わない。バカな評論家は、まわりくどく、解りにくい言葉で、適当なことを言いますが、吉本さんには決してそういうことがありません。その点だけでも尊敬に値します。長生きしてください。元気でいることを祈ります。そのことが励みになります。ここで筆を置きます。

（編集者が発行を遅らせてしまっている間に、吉本隆明氏が三月十五日に逝去されました。本稿は死の二ヶ月前に寄稿されていたものです。）

エッセイ

白餡饅頭

◎尾崎まりえ

どらやきといえば、ふっくら焼かれた二枚の皮の間に小豆の餡子がサンドイッチされているのが基本。皮と餡子が口の中で奏でるハーモニーは、ちょっと疲れた時のお茶のお伴にぴったりなのだが、子どもの頃はまだその美味しさが解らず、オヤツにどらやきが出るたび苦手な餡子をぺろんと剥がし、四歳下で超甘党の弟の口にぽんと放り込んでいた。

それでいて、白餡やずんだ餡は大好きで、上山市の菓子舗十五屋の白餡饅頭ときたら、ゴキゲンナナメな時の特効薬になるほど。辛党の父は、そんな私のよき理解者で、月に一度掛売りの集金のため上山にでかけると、「ただいまぁ」の手には必ず十五屋の大きな箱があった。ほんのり甘い白餡饅頭を心ゆくまで食べた娘は、やさしさ満開。月末の帳簿整理でカッチカチにこった父親の肩を、一生懸命にもんであげたものだった。

その父が、二十三年前に脳溢血で倒れて商売をたたみ、母が介護に疲れた六年前、山形の土地家屋を処分して、八歳下の弟一家が暮らす仙台に住まいを移した。遠く離れてからも、お酒をやめてすっかり甘党になっていた父に、山形市内の菓子店からたびたびオヤツを送ってはいたのだが、昨年の十月の中頃、ずいぶん久しぶりに十五屋の白餡饅頭を食べさせたくなり、わざわざ上山まで車をとばした。翌日、宅急便が届くと母から電話がきて「お父さんが風邪をひいて食欲がなくて困ってたのよ。それが、この白餡饅頭だけは、ぱくぱくっと二つも食べて……」と喜ぶ声。だから、その時点では、数日後に父が亡くなるとは思いもしなかった。

風邪と聞いていた父が救急車で運ばれたという電話がきた時は、普段から医師が往診に来てるのに何事かと驚いた。しかし、八十三歳にもなると、免疫力が落ちている時は肺炎になっていても高熱などの症状が出ないため手遅れになりかねないとのこと。その病院の医師から、二週間も入院すれば帰れると言われてホッとしたのもつかの間、二日後の未明に、容体が急変して亡くなったという電話が飛び込んできた。ニュース等で、たくさんの高齢者が肺炎で亡くなっていることを知ってはいたが、まさか自分の親がそうなるとは……。

葬儀のあいだ中、母が私の顔を見ては「お父さん、最後に食べたのが大好きな白餡饅頭だったねぇ」と言って涙ぐんだ。風邪をひいているのも知らず、単に思いつきでオヤツを送っただけのことだが、こうなってみると、別れ際に言うはずのすべての言葉が白餡饅頭に込められていた気がして、最期を看取れずとも妙に納得できた。

どたばたと葬儀が終わり少し落ち着くと、連れ合いを亡くした一日の長さに耐えきれぬ母が、朝に晩に電話をよこしては思い出を拾い集めるように語りはじめた。今回の白餡饅頭の件をきっかけに「貴女は、小さい頃からそういう子だった」と振り返る。予定より早い時刻に、幼い私が「もうすぐクヌギ屋の角を曲がって帰ってくるよ」と嬉しそうに騒ぐと、間もなく父が出張から帰ってきたという。携帯電話など、夢のまた夢だった頃の話だ。

＊

そういえば、半世紀を生きてきた中で、自分でも理解しがたいことがいくつか記憶にある。とりわけ強烈なのは、二〇〇七年の五月八日の出来事だ。その日の午後、薬師神社の植木市を散歩しているはずの私が、まるで誰かに導かれるかのように、かかりつけの医院の紹介状を携え山形県立中央病院の外科で検査を受けていた。診断結果は乳癌。その後、六月四日に手術で右乳房を全摘し、万全を期して七月から半年間の化学療法を受けた。どうやら瀬戸際で発見できたらしく、毎朝ホルモン療法の薬を一粒飲むだけで、こうして無事に五年目を過ごしている。

山形県立中央病院の外来での抗がん剤の点滴は化学療法室で受けるのだが、当時、その部屋には専門の研修を積んだ三人の女性看護スタッフがいた。厳しい治療で折れそうな心を支えてくれたのは、彼女たちとの明るいおしゃべり。「私なんか、ほんとは死んで生まれたのよ。へその緒を三回半も首に巻いて真っ青な顔でこの世に出てきて、お医者様が赤ん坊の足を持って逆さ吊りにしてお尻を叩き、これで泣かなかったら終わりだなと諦めかけたところで、やっとか細く泣いたんだって…。その時死んでたら、こんな思いしなかったのにね」と自嘲気味に話した時は、手際よく点滴の袋を交換しながら「私はね、三歳の時に井戸に落ちて仮死状態で引き上げられて救急車で運ばれたの。せっかく拾った命だもの、まだまだ大切にしなくちゃ」と笑顔で応えてくれた。

思えば、命を拾ったのは、植木市の始まる五月八日だった。午前中に普段の買い物を済ませておこうといつものスーパーに行き、帰宅して玄関のドアを開けようと鍵を差し込んだが、空回りして我が家に入れない。慌てていると、耳元で「早く医者に行け」という男の

声が聞こえた。振り向いても誰もいない。恐怖で思わずドアの取っ手を握りしめると、今度は、思い出の指輪がプツッと切れた。その男の声は、さらに力強く背中を押す「いますぐにだ！」。私は、そのまま夢中でかかりつけの医院へ走った。

＊

闘病中は、余計な事を考えまいと他愛もないテレビばかり観て過ごしていたが、民放のワイドショーで、手相の鑑定で評判のタレント島田修平を知った。巧みな話芸でいろんな手相を紹介するので、つい引き込まて現在を表すという自分の左手をまじまじと見つめていた。すると、画面で紹介されている線があるではないか！　それも、めったに見ないという「神秘十字線」。島田氏の解説によると、「神秘十字線」の出ている人は「素晴らしい守護霊に守られ、とても運が強い人。霊的とも思えるほど直観力に優れているので、自分の第六感を信じて吉。神社や寺などのパワースポットに行くとエネルギーが充填できる」とのこと。手相は日々変化するそうで、たしかに若かりし頃は、感情線と頭脳線の間にこんな十文字は出ていなかった。

すっかり頭髪を失くしてタオルを被り、痩せて青白い顔の私。そんな尼さんみたいな私が手相を占う姿は、

それこそスピリチュアルな光景だろうが、理科系の目には「守護霊」などという摩訶不思議なものは映らなかった。とはいえ、意味を聞いてしまった「神秘十字線」に引っ掛かり、布団の上で暇にあかせてふらふら思い巡らしていると、やっと、それらしき一人の御先祖様に行き着いた。

父が「戦時中は、武士道に反すると嫌う人が多くて、その名前を言えなかった」と教えてくれた有名な御先祖様だ。その人とは、一七〇一年に江戸城本丸の殿中は松の廊下において、吉良上野介に小刀で切りかかった浅野内匠頭を抱きかかえて止めた梶川与惣兵衛。小学生の頃に、ＮＨＫの大型時代劇で『赤穂浪士』（一九六四年、主演は長谷川一夫）が放送された際、愛知県出身の祖父が十四代目の分家だと聞いたことがある。何代目かの先祖が娘婿の放蕩でお金が必要になり、家系図を売ってしまったため証拠はないのだが、祖父の実家は濃尾平野の一角を所有する大地主（農地改革でそのほとんどを手放したが）で、近くの神社の基礎の石には、寄進者として代々の先祖の名前が刻まれてある。

＊

頭髪も生えそろい、家事に復帰して人並みな生活に戻ったあたりで、せっかく拾って生き延びた命なのだから、もっと見聞を広げようと思い立ち、遅ればせながらインターネットを引き入れた。もちろん最初の検索は、気になるあの人「梶川与惣兵衛」。

史実としての赤穂事件は、歌舞伎の演目に使われる仮名手本忠臣蔵とは様々な点で異なるのを知り、興味深く読み進むうち梶川与惣兵衛の亡くなった日に目が留まった。享保八年八月八日、西暦では一七二三年九月七日と書いてある。なんと、その九月七日は、私の誕生日だ。御先祖様は几帳面に『梶川与惣兵衛日記』なるものを残しておられるから、信じてよいプロフィールであろう。まちがいなく、あの日、植木市ではなく医院へ導いた姿なき声の主は、男性だった。手相の「神秘十字線」が暗示する守護霊とは、まさに、この梶川与惣兵衛ではなかろうか？　難産で死にかけた赤ん坊を守ろうと、二三二年の時を超えてこの世に戻ってきてくれたスーパーマン。兎にも角にも、さっそく実家の墓参りに出かけた。

御先祖様に深く感謝を申し上げた後、島田修平の本『幸せになれる 開運！ 手相占い』を買って詳しく左手を見てみると、もう一つ面白い線があった。それは「あげまん線」で、なんとも品の無い名称だが、この手相の女性は男性を成功させるという。若い頃からあった気がするこの線だが、島田氏によれば「褒め上手で人の才能を引き出してくれる。気がきくだけでなく、さらに運気もあげてくれる幸運の女神。穏かな感じだが、ときに激しく、男をやさしく包み込む雰囲気がある」とのこと。

それが本当ならば、夫と息子をはじめご交誼くださる皆様は、私と親密な時は運気が上昇し、疎遠になると運気が下降するはず。運気が上昇すれば、幸せな表情を見せるだろうが、そもそも、幸せって何だろう。お金持ちになること？　偉い人になること？　一番になること？…幸せの定義は十人十色だから、一人一人にお尋ねしてみなければ、「あげまん線」の真偽のほどは判らないままで……。

二〇一一年十月二十日、訃報を受けて取るものもとりあえず仙台に向かい、すでに病院から清月記（仙台太白斎場）の一室に移されていた父と対面した。安らかに眠っているその顔が、私と会って一瞬微笑んだように見えた。あの白餡饅頭が、よほど美味しかったのだろう。

蛍君、よかったですね。

～祝辞なんかよりずっと向こうまで届けたい～

◎岩井　哲

……「野の文化賞」に限らず、じつは「賞」って何なのか私にはよくわかりません。皆さんにいろいろと示唆を頂戴したい気持も含めて、もちろん螢君へのお祝いのことばとして、あえてかたぐるしく、大袈裟に、面倒くさく述べさせていただきます。

……「賞」って、いただく人間の問題というより、与える方のステータスのような構造で成り立っているように思えてなりません。皆さんいかがでしょうか？

そういえる感触を小生も数年前にささやかながら体験させられました。話を頂いた時点で丁重に理由を述べお断りしたのですが、何をバカなことを言ってるんだとばかりに「貰っていただかないと困ります」という論理で、結局押しつけられたのです。きっと「賞」をいただくということは、どんな人にとっても無前提的に素晴らしく名誉なことだという、与える側の、強い思い込みや信仰があったのでしょう（もちろん悪意などはありえないでしょうから）。そういう気持で私に下さったのでしょうが、だからといってその発想が誰にとっても妥当ということにはなりません。「賞」って何かわからないし、私にとっては不要な物だったのですが、ついに理解して頂けなかったわけです。傷つく人がいるかも知れませんのでこれ以上詳しくは申し上げられませんが……。

……つい先日、「賞」って何かという問題に深くかかわる、とりわけ鮮烈な印象を受ける出来事がありました。芥川賞選考委員の一人であった石原慎太郎氏が記者会見をしていた場面です。今回の選考においてご承知の通り受賞作が円城塔「道化師の蝶」、田中慎弥「共喰い」の二点になったわけですが、そのうちの一点について「あんな作品のどこがいいのかね。くだらないよ」とカメラの前でバッサリ切り捨てたのです。つまり、作品の価値なんていうのは、それを評価するための明確な基準がない以上、恣意的なものだということが鮮明に露呈された場面だったのです。その意味では「切り捨てた」人も、逆に「評価した」人も同じ次元にあるということなのです。嗜好で可否を決しているだけなのですから。つまり、表現者はそのような恣意的なジャッジに振り回され、喜んだり悲しんだりする必要はそもそもないということなのです。

……最近、趣味で調べている分野でも「賞」や「章」を相対化できるひとつの典型的な例を見出しました。

きみ！　またバカのひとつ覚えの幕末か！　なんて冷やかさないでください。英国籍商人トーマス・ブレーク・グラバーのことです。現在長崎市の観光スポットにもなっているグラバー邸で有名なあのビジネスマンです。調べてみると彼の所属していた商社ジャーディン・マセソン商会は、アヘン戦争の時、清国に大量のアヘンを持ちこみ、清国を滅茶苦茶にしたあげく莫大な利益を上げていた張本人の商社なのです（知ったときはショックでした）。そればかりではありません。日本国内の内乱の拡大を画策し、武器弾薬をどんどん売りさばいていたわけです。倒幕派にも幕府にも武器を売ったまではよくある話なのでしょうが、イギリスと長州藩のいわゆる下関戦争のまさに敵勢であった長州藩にさえ武器を大量に流しているのです。そのために作り上げたのがダミー商社「亀山社中」だと言われているんです。どこかで聞いた名前でしょう。坂本竜馬が創設したことになっている商売上の仲介基地です。

しかし、良し悪しは別として、身分や格式を重んじていた時代、一介の脱藩浪士（通常は自藩の間者に追尾され抹殺される存在）が、藩の刺客にもやられず、それどころか犬猿の仲だった薩摩と長州を「薩長同盟」という形で結びつける大仕事をやってのけたり、長州と英国との間の武器取引の仲介をやれた背景には、駐日英国公使のハリー・パークスや通訳のアーネスト・サトウの存在が在ったからのようです。竜馬が勝海舟（近頃の研究では薩長陣営に内応していた幕臣）との出会いを果たす裏にも、同じような巨大な影を感じざるを得ないのです。つまり言いかえれば脱藩浪士の竜馬は自由人であったが故に、政治的にも経済的にも英国に利用され、不要となった時点で消されたということなのでしょう。

今でこそ有名な竜馬ですが、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』（文藝春秋刊）によって維新の立役者として取り上げられる以前は、全く無名の一浪士に過ぎない存在でしたので、利用するのも消すのも簡単だったのではないでしょうか。ただし、会津藩の探索方はそれなりに独自にマークしていたようですが……。

話は大きく脱線してしまいましたが、そんな死の商人トーマス・ブレーク・グラバーは、倒幕を成し遂げた明治新政府にとっては大の恩人なわけで、そのため明治四十一年に勲二等旭日重光章を授与されているのです。一方、理念を共有しながら、幕府や奥羽越列藩へ武器を供給し、最後はカリフォルニア州ゴールド・

ヒルへ渡り、少数の会津藩士たちと「若松コロニー」という理想郷建設を目指した独国籍の商人スネルは、奸賊の徒として、寂しくこの世を去りました。

……螢君、ごめんなさい。

竜馬だのグラバーだの「野の文化賞」と「勲二等旭日重光章」だの、確かに見かけ上は何の関係もないですね。でも、「賞」や「章」は、ある面ではこのようなものなのでしょう。である以上、私たちは醒めた目で相対化しておかなければならないのではないでしょうか。

……ところが、どうもいろんな分野で「賞とりレース」が最近ますます華やかで、妙な感じを受けています。受賞の話題ばかりではありません。誰々が○○賞にノミネートされたとか、世間には野次馬さんたちがたくさんいて、いろんなことを風の便りに知らせてくれます。でもそれがどうしたの？そういう世界観を生きている人がいてもそれはそれでいいんじゃない！という感慨はやはり否めないのです。

賞を頂く方たちの中には能力のある方もたくさんらっしゃいますが、それ以外の得体の知れないものがそのレースの主催（宰）者や観客、そしてエントリーしている当事者の背後に寄り添っているような気がしてなりません。それが何かは分かりませんが。

……「お前も著名な賞でもとって素直に喜べばいいんだ」という声も聞こえてきそうですが、そうとばかりは言い切れません。もちろん力量の問題もありますが、冒頭に書いたとおり、「賞」の位置付けが私には出来ないのです。ちょっと古めかしい喩えで恐縮ですが、北村透谷や二葉亭四迷の頃の文学の価値観を思い出してみてもいいように思います。

文学なんてやって何になるんだ？そういう実利的な世界に対峙しながら必死に答えを出そうとしてもがいた「浮雲」の主人公「文三」の思いに、わたしたちはもう一度立ち帰ってみてもいいのでは？ですから、受賞したとかしないとか、「賞」をとりたいとか拘泥する暇があったら、これまで以上に熱く表現活動に邁進する、そのことの方が本質的に大事なことなのですから。

……私の好きな中原中也は、生前、「詩集・山羊の歌」を出版しようと予約注文を取りました。そうしましたら予約者は十名にも満たない数だったそうです。

また、宮沢賢治は、草野心平が主宰していた「銅鑼」誌上ではたしかに注目されていた詩人でしたが、ビッグになったのは彼の死後、松田甚次郎が羽田書店から「宮沢賢治選集」を出版してからだったということはあまりにも有名な話です。それこそ、螢君のすきな画家

エゴンシーレは、クリムトと決別した後、当時の画壇に媚びることも馴染むことも出来ず、画家としては孤独な生涯を送っています。

……何が言いたいのか……。みんな、大きな仕事を成し遂げた表現者とは、まずは表現活動そのものに魅せられ、他人にどう見られているか、どう評価されているかといった別次元のことには脇目もふらず疾走し続けた人たちだったという素朴な事実のことなんです。

人間である以上、実は俗っぽい欲望を内にいっぱい秘めていたのかも知れませんが、結果において彼等は表現する行為をまず優先的に生きた人たちだったといえるような気がするのです。

螢君なら分かってくれると思い、いつまでも青臭い小生が、場のしらけるようなことをあえて、申し上げていることをお許しいただきたいと思います。

……何年前になるのか調べてこなかったけれど、（平成二年だったかな）「すすきのシアター」で劇団東北幻野旗揚げ公演のころの螢君のギロギロした目。その数年後、共同編集誌として立ち上げた「言の葉倶楽部」創刊の頃の螢君の息づかいは、現在の螢君とくらべると、もっともっと粗野で「野の文化」を感じさせるものを内包していたような気がしてなりません。

いつしか、公務の多忙さもかさなり、「東北幻野」の第一線からはなれ、「言の葉倶楽部」への寄稿も減っていきました。

もちろん、螢君の内部で、表現へのエネルギーがマグマのように活動し続けていれば問題も心配もありませんが、ちょっとだけ気になっています。

いまのポジションは、その意味から言って「野」と「官」のちょうど中間に在るようにも思えます。ですので、その両極を包括して、まだまだ悶え苦しんで、表現を深化させていってほしいと願っています。いずれにせよ、螢君の仕事はまだまだこれからだとおもっています。

……今回の受賞作『東北芸術文化の水脈』のタイトルからも言えるように、「水脈」には源流があり、海へ流れ込むまでの道行きがあります。しかもすべての支流ともそれぞれにリンクしあっているものです。つまり対象の全領域は体系化して抽り出せる世界だと思われます。ぜひ源流から大海までの作業を継続的に成し遂げてくださいね。

簡単ではございますが、螢君への、友人としてのことばとさせていただきます。

（「野の文化賞」授賞式・スピーチに論旨を変えず大幅加筆）

ぐうたら草

◎菊地隆三

第百二段

ポーランドのアウシュビッツ強制収容所の門の所に金属製表示板があって、そこにドイツ語で〈ARBEIT MACHT FREI〉と書いてあると、以前、聞いたことがある。

そのでかい表示板が最近何者かに盗まれたと新聞に出ていた。どんな目的があって盗んだのか、その意図が理解出来ない。

〈ARBEIT MACHT FREI〉即ち、（働けば自由になれる）という看板を門に掲げてユダヤ人をここに入れた。裏を返せば（働かざる者、食うべからず）ということで、私みたいに怠惰な老人は真先にガス室に放り込まれたであろう。

今は働く気力のない若者が沢山いる。こういう人達は、どうなっただろうか。殺されると知ったら働き出すだろうか。

それにしても文明人と言われたドイツ人の一部の人達が、同じ人間であるユダヤ人を百五十万近く、ここで大量虐殺したという。思っただけで身の毛のよだつ話しである。

何故、こんな愚行を人間が起こすのか。

ナチスのように、一つのスローガンを掲げて、皆、同じ方向に走るのは危険極まりない。「紅旗征伐　吾事ニ非ズ」という臍曲りもいることも、絶対に必要なのである。

第百三段

あんなに物を慾しがり、物を傍に集めたがっていた自分が、この頃すっかり物を慾しいと思わなくなっている。ほかの慾望についても同様である。

しかしこれは悟りを開いたからとか、（多蔵必厚亡）〈老子〉を学び知ったからとか、そのような訳ではない。ただエネルギーがなくなっただけのことである。枯れかかっているというだけのことである。

間もなく総ての物と訣別する時期が近付いたことを不承不承認めざるを得なくなっただけのことである。

ぐうたらであろうと、なかろうと、皆、こういう結果に至るのだろう。

しかし、今のこの状態、意外と、さばさばして、身も軽く感じ、そう悪い気分でもない。

第百四段

テレビは、殆ど、見ない。

ニュウスは、新聞で、事足りる。

たまにつけると、お笑い番組に近いようなものが大部分である。コマーシャルもうるさい。見ているうちに腹が苛立って来て、必ず下痢する。目もしょぼしょぼする。私の体には、テレビは確実に有害である。但しテレビを見ないと生きている張り合いがないという人もいるので、テレビに向って文句を言う筋合はない。

第百五段

殺人事件での〈冤罪〉が、何回かニュウスになった。ぬれぎぬを被せられた人は、大変気の毒なことである。

しかし、何故こんなことが起きるのか、素人の私には疑問に思う点もある。

自分が人を殺したかどうかは、本人は、絶対に分かっていると思う。

もし自分がやっていないのなら「絶対、俺はやっていない」と言い通せないのだろうか。どうして「俺がやりました」と偽りの自白してしまうのだろうか。

戦前と違って、今は取り調べでは暴力や拷問はないと聞いているが、取り調べきついことはあり得る。その辛さから逃れるために、つい「俺がやりました」と嘘の自白をやってしまうのだろうか。

人間は、本質は、弱い人が大部分なのかもしれない。どうしてもこういう辛い目に会いたくない、そして疑われたくないためにも、常日頃、「李下に冠を正さず、瓜田に履を納れず」と、行いを慎んで、自分の身を護るしかない。

第百六段

百聞は一見に如かず。

百見は一触に如かず。

吾人は、須らく対象（物・人）に触れること肝要なり。

（痴漢は論外なり）

第百七段

今の日本国憲法は、戦後、米国より押し付けられたものだと言われる。

しかし日清戦争以来、十年毎に戦争をやって何百萬人と命を落として来たのに、終戦後、数十年間一度も戦争をせず平和で来られたのは、大変、有難い。これは新憲法の御陰であると言っていい。

同じく米国から押し付けられたのに、新民法がある。これは従来の日本の醇風美俗を破壊してしまった。

男女平等は良いとするが、家系を重んじること少く、核家族化が進み無縁社会を増長している。

子供は皆平等で、親を養ったから財産を余計貰える訳でもない。親がよぼよぼになったら、すぐ施設に放り込み、国に面倒を見て貰うのが当り前だと思っている。

以前のように、同居して親の老後の面倒を見た者（大抵は長男）が優遇されるような民法に、また戻して貰いたい。

（焼野の雉・夜の鶴）のような親の愛を、忘れてしまって、あっさり姥捨山に追いやるような風潮は情け無い。

だからと言って、親孝行を強要する積りはないが……。

第百八段

「煩悩の犬は追えども去らず」と昔から言われている。

この世に生きる大部分の人に、燃え盛る百八煩悩が身を焦がしているからこそ、この世は面白い。

皆、枯淡の境地、水鏡の如き平らな心境の人のみだとしたら、この世は靜かで、退屈でしょうがないだろう。

古今の文学・芸術もまた、燃え盛る煩悩があったからこそ、それを昇華させ、人々に大きな感動を与えてくれたのである。

煩悩即この世の宝の根源である。

百八煩悩の火よ。遠慮せずに燃え盛れ！

第百九段

以前、木造の家の中には鼠が跋扈していた。特に台所には餌を求めて外部から多数侵入して来た。

その時は、わが家では鼠取りの名人、Eじいさんを頼んだ。

夜、このじいさんは台所にじっと座ったままで、絶対に動かない。目は開けてはいるが、目玉は動かさない。すると鼠の奴はじいさんを木偶と見くびって、

その前を平気で走り廻るようになる。その時さっと手を伸ばし、ぱっと鼠を素手で掴まえる。この際肝腎なことは、一瞬のうちに鼠が気絶するほど強く掴むことだという。かわいそうな気もするが、これは真剣勝負だから仕方がない。恐恐と掴むと、鼠は首を後に廻して、素手をぱくりとやる。鼠咬症になって、人間の方が危い。

このじいさん、一晩で十匹も捕えてくれる。たかが鼠取りと言っても、これほどの名人になると、剣術の神様のように、周りの人から尊敬され、義賊・鼠小僧次郎吉の向こうを張って、鼠太公望と言われた。

今は台所も改善され、鼠も出入りしなくなったので、このEじいさんの出番はなくなった。

今年九十九歳になるが、掴んだ自分の命はしっかり手離さず、今なお矍鑠たるものがある。

第百十段

一事に特技のある人は、ほかのことにも目が効くようである。

前段の鼠取り名人、Eじいさんのことである。

以前、私は花畑に蓮池を掘った。ところがどうしても池の水洩れがして、翌年、蓮が枯れてしまう。そこで、このじいさんに相談してみると「同じ大きさの土粒だから水洩れするのだろう」と言って、丸二日間、蓮池に裸足で入って鍛えた素手で池の泥土を掻き廻し、こね廻してくれた。すると三日後から水洩れがぴたりと止まった。大粒の土の隙間に、細くなった土粒がびっちり嵌り込んで水洩れを遮ったらしい。

「世間と同じ、大粒、小粒いろんな人がいて丸く治まる。（小、よく、大を支える）と言いますからな……」

このEじいさん、一服したがら哲学者のようなことを言う。

以来、三十年近く、この池に蓮は咲き続けている。

鼠太公望は花咲爺いでもあった。

第百十一段

一九八五年（昭和六十年）の夏、日航ジャンボ機が「アーネブル・コントロール」の機長の叫び声を最期に山に墜落、五百人以上の乗客が死亡した。

翌年一月にはスペース・シャトル（チャレンジャー）が打ち上げ一分後に爆発、乗組員全員死亡した。

同年四月にチェルノブイリの原発事故が発生した。人的被害も大だったが、このため全ヨーロッパの生産物は暴落した。おかげで高級ワインが馬鹿安く手に入ったなどと、喜んではおられない。

それ以降も、次から次へと似たような大事故が起き

ている。そしてついこの前、福島原発がが、メルト・ダウンした。

これ等は総て人間が作った物ばかりで、それが人間に牙を剥いているのである。そして、これ等は、百年前なら考えられもしない事故ばかりである。

人間はもっと弱虫になるべきである。もっと謙虚になるべきである。石橋を叩き叩き、更に這うようにして、もっとスロー・テンポで進むべきである。

第百十二段

平成の御代になったばかりの頃の話である。

美空ひばりさんという大歌手がいて「川の流れのように」という大ヒット曲を歌って、間もなく亡くなった。

その同じ頃〈UNOさん〉という、人のいい男がいた。推されて総理大臣になった。

総理大臣になったことは大変目出たい話だが、在任期間は二か月足らずという超記録的な短期在任であった。

何も侵略戦争を始めた訳でもない。脱税・収賄した訳でもない。〈隠し女〉がいたことがばれただけの、どこにでもありそうな下世話なシモネタめいたことだけの果てだった。この男、慌てて「NO」「UNO」と否定してみたが、認められなかった。

人生、それぞれの〈川の流れ〉がある。好色でお人好しの〈UNOさん〉は、小川なのに増水した桃色の流れに泡と消えてしまった。

この小話、近代史から抹消してしまうのには、惜しいほど人間的で、そして間抜けてとても面白いので、ここに記して置く。

第百十三段

私の祖父は秋の稔の頃の雀は「ほーやれ、ほう」と追うなと教えた。雀だって、生き物。生きるためには食れないではおられない。追われた雀は、他に飛んで移動するのにエネルギーを消費し、その分だけ余計稲穂を食べてしまう。結局、大声で追う方は喉を痛めた上、更に余計に食べられて俵の中味を減らしてしまう。

また、春先に庭や畑に残った雪は、何も難儀して片付けたり消したりするなと教えられた。人が難儀して動かなくとも、お天道様が消してくれる。そのような時間があるのなら、のんびり昼寝でもしたり、本でも読んでいた方が良いというのである。

〈ぐうたら〉の神髄に触れるような教えだと、今にして思う。

第百十四段

国家権力というものは、追い詰められれば、何をするか分からない恐いものである。

数本年前までは、若い者が皆、赤紙一枚で駆り出され、戦場に送られ、何百萬人もの生々とした命が奪われた。

今や、超少子高齢化の時代、今度は年寄りの番だなどと言われないとも限らない。

そのうちに〈新赤紙法〉など出て来るかもしれない。

〈新赤紙法〉曰く、

「貴殿は、この度、満九十歳に達したに付き、〇月〇日、午後三途（三時）まで、姥捨山終命寺に出頭せられたし」とか。桑原、桑原。

第百十五段

一所不住の画伯・斉藤隆氏は私の敬愛する画家である。日本各地を転々とし、今、福島県の山奥にいる。

彼の絵の力強さには圧倒されるが、この頃書にも大変風格が出て来ている。

斉藤画伯から最近分けて頂いた書がある。

曰く、〈眼横鼻直〉

「眼は横に一文字に、鼻は縦に真直ぐに、」当り前のことである。この当り前のことが、一番、有難いことなのである。この当り前の事象の中に、総ての真理が含まれているという意味だろう。

同画伯の手紙に〈眼横鼻直〉に〈柳緑花紅〉などと同じ意味と書いてあった。有難い御教示であった。

第百十六段

マングースは毒蛇ハブを食って、縞蛇は青蛙を食って、青蛙は蠅を食って、蠅は糞を食って「おいしい。おいしい」と言っている。

「僕は毎日、人を食っている。あれはおいしい」と言った某国の大物首相もいるらしい。

私は下手物好みという訳でもないが、室鰺（むろあじ）の「くさや」、琵琶湖の「鮒鮨」など大好きである。

「くさや」は焼く時、強烈な臭いを発するが、焼きたてを超熱燗の酒にぶっ込むと、臭いも和いで身も固くなく、これほどおいしい酒の肴はない。

生き物は何かを食わなければ命も保てないし、「蓼食う虫も好き好き」なのだから、他人様（よそ）の好みには一方的に文句は言えない。

毎日毎日、多量のにんにくを食べている国の人もいるが、正直言って、近付いただけで体臭が酷い。しかし、これとっても文句は言ってはならない。我慢しな

ければならない。
お互い自分中心に言い合ったら、戦争になるかもしれない。

第百十七段

「遠き物を宝とせず」と兼好法師さまが言っておられるが、火星や金星ならいざ知らず、今や飛行機の時代で地球上遠い所など、どこにもなくなった。
また食い意地の張った話だが、海外にも「宝」級の食べ物がいろいろある。
その中でも、私にとって垂涎の的になるのは、ブルー・チーズである。
イタリアのゴルゴンゾーラ、イギリスのスティルトン、フランスのロックフォール等、最高である。このブルー・チーズとパンさえあれば、ワインのつまみ等なにもいらない。今では、日本のデパートで簡単に手に入る。しかも日本の最高の珍味と言われる「からすみ」「このわた」「松茸」などより、かなり安い。
それにしても、このブルー・チーズを初めて作り出した人達は偉いと思う。
フランスのロックフォールの作る現場は見たこともないが、元はと言えば放っておいた食パンに生えた青かびが、生の羊乳にまぎれこみ、岩場の洞窟に置いたところ発酵し、口に入れてみると美味だったことを羊飼の若者達が見付け出し、それが洗練されて、現在のロックフォールになったという。素晴らしい食文化の誕生である。
今や、地球は運命共同体の一つの星に過ぎないということが分かった。戦争なんてしている所ではない。各地に産出するおいしい物を分けあい、食べあい、ほめあって、仲良く楽しく生きて行く場所である。
この意味でも、ブルー・チーズなどは、世界平和のために大変貢献している。
ブルー・チーズ、万歳。

第百十八段

左に、四十年近く続いている我が家の朝の食卓のメニューを記しておく。これ以外のものは、何も出て来ない。一回たりとも、内容が変わったこともない。超超マンネリズムである。

米　御飯　一膳
わかめ味噌汁　一椀
季節野菜おひたし（殆んど、ほうれん草）
納豆　小パック一つ
卵一つ（スクランブル）

じゃこ魚　少々
擦りごま（しょう油味）
牛乳　一合
梅干し　二ケ
緑茶　二杯

「よく飽きないね」と言われるが、少しも飽きない。家族も、一同、元気である。
などと自慢をしていると、ぽくりと往く可能性があることは承知だが、順番通りなら、何も文句はない。（当然、私が最年長者である）
それにしても、よくぞ毎朝四十年間も同じ物を作ってくれたものだと、（おさんどん様）に、感謝している。
「ありがとう。継続は力の源なり。」と。

（つづく）

〝象徴（シンボル）〟への航海
～もう一つの世界～

◎鎌上　宏

一、絵本『てととととて』（抄）

浜田桂子さく　（福音館書店　二〇〇二年）

て　わたしたちの　て。
ては　まいにち　いろいろなことを　する。
　かおを　あらう　ごはん　をたべる……
でも　それだけじゃない。
もっとすてきなことも　できるよ。
たとえば　ては　がっきになる。
ては　べんりな　どうぐにもなる。
てで　あそぶ。てだけで　あそべる　いつでも
　どこでも。
ころんだり　ぶつけたりして　どこか　いたいと
きは　てで　なでてごらん。
いたみが　ずいぶん　おさまるよ。
さむいときは　てで　からだを　こすってごらん。
ぽかぽか　あたたかくなるよ。
ては　ことばを　つたえる。　とおくに　いても
　わかるよ。
ては　はなしだってする。……
なんだか　ふしぎな　ちからも　てには　あるよ。
たとえば　はくしゅだ。
やすみなく　てを　たたくと　はくしゅになる。

二、本論『シンボルへの航海』

（一九六六年「美術出版社」のち「講談社文芸文庫」）

第一章　手の変幻への繋がりとしての本体、
　その周辺

昨年十月、妻が初めて本を取り寄せて買ってくれた。高価な『事典』である。帯に「二十一世紀、新たな〈学〉の創造へ～東西の思想を比較した世界初の事典」「比較で読み解く思想のかたち」とある。買ってほしいと強請ったわけではないが、「これでまた一生懸命勉強してください。」とメモしてあるのが嬉しかった。はたしてこの事典を手にして自らの思いを紐解けるものなのか、はなはだ心許ない。だが、一生懸命、格闘はしようと思う。

あくしゅする。
てと　てを　にぎって　むきあって。
　はじめて　あっても　ともだちになれそう。
けんかしてても　なかなおりできそう……
て　てって　すごいなあ。　もしかしたら
ては　こころが　でたり　はいったり　するところ
　なのかもしれない。

絵本の『てととととてて』は、二〇〇九年の青少年読書感想文全国コンクール小学校低学年の部の課題図書である。この絵本は、人間というものの素晴らしさを発見するのに多いに寄与することだろう。大人にとってもまことに示唆に溢れている。「ては　こころが　でたり　はいったり　するところ　なのかもしれない。」この視点は、「手の変幻」について言いがたい含蓄を含んではいないだろうか。

二　仏像出現

〝手の変幻への航海〟に船出するまえに、その本体について多いに逍遥しなければならない。西洋のビーナスに比する東洋の像へと大きく舳先を向ける方向は、仏像である。仏像といっても茫漠としてまた謎めいている。参拝の対象であるが、むしろ謎だらけの造型群といってよい。仏像の出現、仏像の展開、曼荼羅との関係、持ち物、そして印相、まことに広大すぎて捉えがたい。しかし、この仏像を生み出す源となったインド釈尊の教え、仏教を考えるとき、気の遠くなるような道のり、〝時空〟を踏みしめて来たことを想像しなければならない。南へ、西へ、北へ、東へ。そして東のその果てのわが国にも伝来した仏教、それとともに日本の歴史があったことは確かである。仏教の経典など三蔵、仏教建築、仏教用具など実に様々の展開があるが、とにもかくにも仏教の象徴、その意味をあれこれとたぐり寄せて納得したいと考えている。

（一）偶像禁止～象徴のない時代

古く溯れば世界信教の中で一神教の宗教は、偶像崇拝を禁止している。仏教も、バラモン教の思想的土壌の中にあって偶像崇拝、すなわち仏像の造像を禁じていた。

仏教とは何だろうか。仏教は、インドの釈迦（ゴータマ・シッダッタ）を開祖とする救いの教えで、生没年代は今日ではアショーカ王（在位は紀元前二六八年頃～紀元前二三二年頃、マウリヤ朝の第三代王）の即位年に基づいた中村元の紀元前四六三～紀元前三八三年が有力とされる。キリスト教・イスラム教と並んで世界三

胎盤をすこし眺めておきたい。『仏像の誕生』（高田修）、『仏像〜仏教美術の源流〜』（杉山二郎）らの文献から要点を借用する。

仏教が誕生してからおおよそ五〇〇年間は、インドでは仏像が造られなかった。

釈迦の生前には自らの智慧によって苦悩から超越するという〝悟り〟を多くの人々に分かりやすく説いたものであり、自分以外のものの他、偶像に身を任せることによって救われるということは許されなかった。

釈迦の涅槃後（滅後）には釈迦の説いた法（ダルマ）とともにその遺骨を崇拝する信仰が起こり、その舎利を祀るストゥーパ（仏塔、卒塔婆）が造られ、その周辺に、仏教を学ぶための僧院も建てられるようになった。時代が進むと、ストゥーパのまわりに、塔門や欄楯（玉垣）が設けられ、その柱や梁には装飾のため、仏伝図（釈迦の一代記）や本生譚（釈迦の前世の修行物語）などの浮き彫りが施された。有名なパールフット仏塔、ボドガヤー仏塔、サーンチーの仏塔（紀元前二〜一世紀造営）があるが、人間の姿をした釈迦の像はそこには施されていない。

それでは、造像の代わりに象徴物が果たしてきた役割は何であったのか。僧集団であれ在家の信者集団であれ、急速に広まっていった仏教信仰者には、憧れて

大宗教のひとつで、仏陀の説いた教え、また自ら仏陀に成るための教えである。仏像や仏閣などは、日本でも数多く見られるが、政治的な目的で民衆に信仰をわかりやすくする目的で作られた。開祖の釈迦は偶像崇拝を固く禁じていた。

釈迦について、特定しがたいところが多いが、シャーキャ族王・シュッドーダナ（浄飯王）の男子として現在のネパールのルンビニで誕生し、王子として裕福な生活を送っていたが、二十九歳で出家、三十五歳で正覚を開いた。まもなく釈迦のもとへやってきた梵天の勧めに応じて、釈迦は自らの覚りを人々に説いて伝道して廻った。南方伝では二月の満月の日に八十歳で入滅したとされる。

悟りを開いた釈尊は、一生をその伝道の行脚に生涯を費やした。幾度も確認するが、生前中は崇拝の対象としての偶像は造られることはなかった。インドのバラモン教など前宗教でも、釈迦が開いた教えでも偶像の崇拝を禁じていたのである。生前、そして入滅からおおよそ四百〜五百年間、尊崇する人々の篤い信仰にもかかわらず仏像は造られることがなかった。

（二）偶像禁止〜象徴が兆した時代〜無仏時代の象徴

その間のインドで仏像が生まれなかった社会の基盤、やまない理由があった。当時のインド社会の呪縛、束縛。釈迦はそのことに自らも苦しみ、そこからの解放を求めた。理に合わない、不平等な人生、自由でない社会。出自を束縛する四姓制度、厳しい身分差別があり、男女不平等があり、人生を苦しめる輪廻の考えが満ち満ちていた。

釈迦は、その実体、束縛は〝空〟であると悟り、宣言した。その束縛を意識する自分を成り立たせている自我さえも無であると宣言した。生まれながらに苦しむ人々は、その教えを啓示と受けとめ、救いの仏陀として尊敬した。その開祖である釈迦の坐った方形の台座、樹下の仏座、傘蓋を立てた仏座、仏足跡、菩提樹、輪宝、仏塔など象徴的に象られたものを前にして祈り、観想する毎日。尊敬してやまない日々の観念の時間は、インド北部地域を中心に悠にとうとうと流れた。

主役の仏、または菩薩を欠く代わりに、そこに主役のいることを示唆する何かがつねに描かれている。方形の台座、樹下の仏座、傘蓋を立てた仏座などがそれで、仏足跡や聖樹（菩提樹）、輪宝（車輪樹）、遺骨を埋葬した墓（ストゥーパ、卒塔婆）、仏塔などである。仏座はそこに仏の座っていることを示唆し、輪宝は仏の説法することを象徴するもので、馬と傘蓋とで太子が馬に乗って城門を越える出家踰城を示すものもある。その

ほか聖樹だけで仏の成道を、仏塔だけを描いて仏の涅槃を意味させたり、または仏そのものを象徴したり、いろいろの工夫がなされた。それらのことはバールフット仏塔の銘を伴う仏伝図から明らかになったもので、これによっても仏の姿を意図的に表さなかったことが知られる。

のみならず、仏伝図の主役である釈尊だけに限られず、バールフットでは過去仏六人のうち五人を各仏の菩提樹と空座とで示した図があり、銘によってそれぞれの仏を比定することができる。過去仏は、釈迦仏を含めて過去七仏といわれるが、サーンチー仏塔には七つの空座を伴う菩提樹、あるいは七つの仏塔を並べて描いたものがある。これらの例は、特別視された釈迦仏に対する考え方が過去の諸仏にまで拡げられたことを示すものである。

古代初期の仏伝図においては、仏の姿はもとより菩薩の姿さえ絶対に描かなかった仏教徒の抱いていた仏陀観、当時の宗教的環境が考えられる。

（『仏像の誕生』高田修）

釈尊滅後から仏像成立までの無仏の時代は、時の流れに沿って仏陀の存在を暗示する多様な象徴が造型されていく。

（三）仏に円光が兆した時代

いつの頃から、なにゆえ仏像は造型されたのか。顕現したのか。

法輪、塔婆、菩提樹、仏足、台座など象徴物の基礎にシャキャムニの行動様態なり活動する姿なりが、いますが如くに追感想像できることが必要であり、幻の国インド人の資質の上にこそ最もふさわしかったのかもしれない。だから抽象的思考になれた、空想力に富んだ人々にとって、上等のすぐれた神々を人間の姿で表現する必要がなかった。……こうした象徴物の造形表現が少なくともガンジス農耕地帯に仏教が流布している間、まあまあ伝習の力とインド人固有の資質の中で、続けられていた。それは紀元前後までの頃のことであった。（『仏像〜仏教美術の源流〜』杉山二郎）

釈尊滅後から仏像成立までの無仏の時代は、時の流れに沿って仏陀の存在を暗示する多様な象徴が造型されていく。

ガンジス河の農耕社会でのヒンドゥー教に対する革新宗教だった仏教も、多くの部派に分かれて、とくに説一切有部といった宇宙世界のすべての現象の中に存在論としてのあり方を見ようとする人たちにとって、観想や想念のなかでしか宗祖をとらえられないもどかしさがあったに違いない。こうした人たちと、神々を人間の姿形で具体的に造形化してとらえるギリシア系、西アジア人植民者たちとの間の、存在論的な考え方についての影響交渉が、仏像を造りだすに何らかの力が働いただろうことは充分に予想される。そしてどうやら北西インドのガンダーラ地方で、紀元二世紀の中頃から、シャキャムニの姿が具体的な人間の姿で表現されはじめたらしい。（杉山二郎）

立像でも坐像でも、初めのうちは、他の人たちと身長や衣服などで区別することがなかった。唯一の区別は、シャキャムニの頭部のまわりに円光が描出されていくのである。（一世紀末、祇園布施の浮彫、二世紀、燃燈仏本生の浮仏、杉山二郎）

（四）偉大な導師
〜超人化と三十二相〜観念上の仏の姿かたち

古い成立とされる阿含（北方系）・ニカーヤ（南方系）と呼ばれる経（スートラ）の集録と、教団の生活を律する律（ヴィナヤ）とをさす聖典には、伝説化された偉大な導師として描写され、それとともに理想化されて人間性や歴史性が希薄化し、普通人とは異なる超人的、いわば神的な存在であることが強調されているものを見出す。これは仏に対する教団や一般仏教徒の信仰が仏の滅後、時の経過とともに増大し、それと並行して仏の神性がいよいよ強く意識されていったことを示す。実際、経典に現れる仏は計り知れない知恵があり、きわめて優れた仏徳を備えるのはもちろん、超自然的な奇跡（神変）を自由に示して人々を教化するとされ、またその身は清浄で光明に輝き、普通人にはない三十二肉体的特徴（三十二相）を生まれながらにそなえ、どんな人間よりもまた神々よりも優れているとされているのである。（高田修）

経典には仏の精神的な偉大さを形容する記述は多いが、仏の肉体的な形体すなわち視覚で把えられる姿かたちについては、具体的に説くところがほとんどない。だが仏が普通の人ととくに異なることを強調するのにしばしばいわれるものに三十二相があり、この三十二相は元来は、占相（観相）する場合のポイントとなる身体的な三十二の特徴のことで、これらを生まれながらに備えた人は、出家すれば必ず仏に、また在家ならば世界征服の帝王（転輪聖王）になると信じられた。……古い時代から占相上で伝承されていたのを仏教に取り入れ、仏の偉大化、超人化に役立てたことと関連しており、仏像のない古代初期では造形美術とは無関係にただ観念的に言われてきたものにすぎない。しかし、仏を観想して心象の中に仏の姿を彷彿する、いわゆる観仏の行法に用いられてきた。後には仏像の表現とも関連を持つようになるが、それは次の時代になってからである。（高田修）

（五）〝一切は実在する〟〜仏像の誕生

仏像出現の直前（サカ・パルティア時代）、インドの初期仏教では、「眼に見えるもの、手に触れるものは本質とは異なる」とされており、経典の成文化と仏像の制作は長い間タブー視されていた。「本質は、本人の修行によって、人それぞれの心で理解されるもの」という古代バラモン教以来のインド的発想法に基づくものである。

アショーカ王によってガンダーラ地方に伝えられた仏教は、前一世紀になると「心に感じられる一切のものは実在するという説（説一切有部）」の思想が主流になっていった。「心に感じられるもの」の中には、眼に見えるものや手に触れるものも含まれ、これらの実在（有）を認めることであった。この考え方は視覚的現象の肯定であるから、思想的背景は仏像の制作と経典の成文化が行われてもよい風潮が成立してきたことになる。（『ガンダーラ美術の見方』山田樹人）

（六）造像～仏像が製作された二つの地域

インドの仏像起源は二つあって、ガンダーラとマトゥラーとされてきた。ガンダーラは、インド北西部のパキスタン北部一帯とアフガニスタンの一部、マトゥラーは北インドのデリー南地方である。西北インドは、内陸アジアを通るシルクロードから分かれてインド内部に通ずる東西交通の幹線路といわれ、アレクサンドロス大王の東方遠征などによって東方の地域に伝播し融合したヘレニズム文化が根づくなど絶えず内陸からの異民族の侵入を受け、ギリシア文明の東西の交流、文化刺激が造像をもたらしたガンダーラ美術圏の由縁とされる。一方マトゥラーは、インド文明の中枢ガンジス川流域と西北インドやインド西海岸を結ぶ通商交易の要衝で、特に商業的に殷盛した。そこで独自の様式の純インド的な仏像を創作し、ガンジス川平原の仏像の制作をリードした。

仏像の起源としては、ガンダーラ仏の誕生が後一世紀末期で、マトゥーラ仏の成立は後二世紀前期とされるが、ガンダーラではその作品に仏伝や本生話など小乗的な傾向が認められ、大乗菩薩などから少なからず大乗教徒がかかわっていた。しかし、「汝ら（仏弟子）は如来の舎利供養のために煩わされてはならぬ」（大般涅槃経）ことから、仏教教団として積極的に仏像、仏塔の造型活動にかかわったことはなく、むしろ仏像に刻まれた奉献銘から社会各階層の熱心な推進者がいたことが推察される。（高田修）

マトゥラーにおいても、仏像不表現の伝統は固く守られており、何らかの動因、きっかけがない限りその伝統の殻を打ち破ることは出来なかった。しかし、仏の像の表現はマトゥラーに出現するに至った。仏像不表現の伝統を破って造像するという一撃がガンダーラからマトゥラーに伝えられた。マトゥラー仏は「菩薩」と銘されており、成道以前の釈尊を指すのでなく、タブー視されてきた造像を受け入れるために考え出した仏教徒側のいい訳と考えられている。ここにガンダーラ仏像の造型上の影響は当初は見られず、仏像不表現の伝統を打ち破ったという仏教的環境の変化がもたらされたのである。（高田修）

（七）仏像の誕生～まとめ

釈迦像は、まず、仏教教団が関与するかたちではなく、在家集団など熱心な信仰を求める余りの造像推進の働きかけで造られ始めた。高田修が指摘するように、主役のいることを示唆する何かがつねに描かれ、台座、

樹下の仏座、傘蓋を立てた仏座、仏足跡、聖樹、輪宝、仏塔、いろいろの工夫が時の流れにしたがってなされ始めている。釈迦像については純粋なインドの宗教的背景に依ってではなく、西方ギリシア・ローマの彫刻作製に刺激され、地域的に近いガンダーラ、そしてその直後にマトゥラーに伝搬し造像機運がもたらされた。

第二に、仏教教団側では、古い時代から占相上で伝承されていた冥想法を仏教が取り入れ、仏像のない古代初期には仏を観想して心象の中に仏の姿を彷彿する、いわゆる観仏の行に用いられた。また、宮坂宥洪に『真釈 般若心経』があるが、その中で「釈尊滅後五〇〇年の間は、世界の宗教と同じく偶像を作製し崇拝することは禁じられており、紀元前三世紀のアショーカ王時代の仏塔の欄循の仏伝レリーフには仏陀の姿は描かれず、法輪、菩提樹が刻されているのみ。紀元後一世紀にギリシア美術の影響で北インドのガンダーラ地方で始まった仏像彫刻、同じく北インドのマトゥラーでも仏像の製作が始まっている。これは、仏陀を〝偶像〟として崇拝するようになったというよりも、仏陀が眼前にいるかの如くに〝観じる〟〝観仏〟する冥想が行われ、比類ない人間精神の至高の表現として生み出されていったことと深く関係しているのではないか。」と述べている。宗教者側からの貴重な指摘といえる。

これら、釈尊にかかわって象徴的な記号のことについては、また自らの納得のために考察する機会があろうと思う。

永遠の夏

◎大江利知

数年前
父さんと母さんと一緒に行った由良の海
高校一年生の頃まで
よく夏に泊まった旅館は
すっかり大きく変わり
違う名前になっていた
——夏
小さかった旅館からは
すぐに浜辺に行けた
ちいさな島と
おおきな島とが離れてあった
岩場で足を切ったりしたが
カニと細かな魚たちが

わたしを呼んだ
ヤドカリをみつけては大喜びし
少し湿った潮風
大きく眩しい太陽
波は揺れながらキラキラときらめき
永遠に夏が続くように感じた
若かった母は水着姿で
砂浜にシートを敷き
わたしと弟が波にたわむれ
岩場で遊ぶのをみつめていてくれた
父も若く
体の力を抜くと海に浮かぶよ、と
ゆったり浮いてみせてくれた
父も母も共働きだったので
この夏休みの二日、三日間位が
一緒にゆったりできる時間だった
そんな時間は
夜に催される花火大会で
いつも　明日家に帰ることが
合図になった
打ち上げ花火の大会がにぎやかに
終わった夜

波の音だけが静かに耳に響き
深いしじまが眠りを誘った
久し振りに訪れた同じ場所で
父さんと母さんは笑った
白髪になった父さんと母さんは
若かった時の自分たちの大切な何かを
わたしに与えて、ゆずってくれたように感じた
永遠に思えた夏は
父さんと母さんがつくってくれた
尊い命の時間だった

我が愛すべき児童文学

一本のシラカバの木になった乙女あり
「ギリシャ神話」私も同じ

〝生きてゆく、どんなことがあっても〟と
勇気をくれた「赤毛のアン」よ

支えとは誰かを生かしてゆくことと
「あしながおじさん」のように生きたい

〝カンパネルラ、寂しい時にいておくれ〟
宮沢賢治「銀河鉄道の夜」

いつの日か皆家の外に行くのだよ
メアリー・ノートン「床の下の小人たち」

永遠に少年でいるね
「ピーターパン」今も空を自由に飛んで

友情を忘れないで少年たちよ
ケストナーの「飛ぶ教室」は云う

戦に行く父の想いがたくされた
安房直子の「ひとつの花」

アンネ・フランクあなたがこの世につないだと
松谷みよ子の「屋根裏部屋の秘密」

夢じゃない　冬の一晩遊んだの
朝の庭で消えていた「スノーマン」ひとり

お月様はしずかにみていて語ったの
アンデルセン「絵のない絵本」

真実のひと葉になった
あたたかな心が描いた「最期のひと葉」

戦争で亡くした主を椅子は呼ぶ
松谷みよ子「ふたりのイーダ」

自分とは歩いてゆくから自分だと
シルヴァスタイン「ビッグ・オーとの出会い」

シシリー・メアリー・バーカーへ

あなたは幼い頃から
花のなかへ
妖精をみた
あなたの絵は　空想ではなく
本当に妖精をみている
なぜ　花なのか
花は希望の花言葉を

たくさん持っているものね
妖精は　そして花の蜜を吸って
生きているのよ
あなたは一生を妖精を描いて過ごした
ねえ　シシリー
あなたは　なんて
美しい人なのかしら

子守唄

みんな　おやすみ
天上からドヴォルザークの〝新世界〟が
ゆるやかに聞こえる
そっと耳を澄まし
ゆっくり瞳を閉じて
今日を生きられたことに感謝し
静かに　おやすみ
ある人が届けてくれた言葉
〝陽は　またのぼります〟
明日は来るのだよ
陽のあたたかな光が差し

明日は来るのだよ
みんな　おやすみ
みんな
みんな
おやすみ

冬の星座

——あれがオリオン座
　あれがカシオペア座
　そして　あれが北極星

母は小学校低学年だった私に
冬の夜空を見上げて言った
ちいさな町のただ一軒だけの薬局に入り
青い薄い缶のニベアクリームを
買ってくれた

——ほっぺと手にぬるんだよ

母と私は小学校の坂をゆっくり登り

冷たい空気がはじけそうな夜の
散歩を楽しんだ
冬の星座は天高くあったが
こぼれて落ちそうにもみえた
しんと静まりかえった夜
私は宝物を持ち
母と家路についた

——あれがオリオン座
　あれがカシオペア座
　そして　あれが北極星

母の声はいつまでも胸に響き
私も一緒になって
一生懸命　くり返した
幼かった冬の夜

おでこ

◎尾崎まりえ

高熱をあげるたび
お父ちゃんの大きな手が
オカッパの前髪を払って小さなおでこを覆い
水銀体温計より速い決断で
かかりつけのS医院へと抱いて運ぶ
白いシーツの診察台に寝かされた娘は
お尻を剥かれてペニシリンをぷすり
扁桃腺が縮んで大人しくなる頃には
オカッパも肩まで伸びて
春風になびくパーマの前髪は
お父ちゃんの手からするりと抜けた

その日
お爺ちゃんになってしまったお父ちゃんが

白装束に身を包み
白い棺の中に寝かされていた
「ご出発です。お別れをどうぞ」
　どこへ連れて行くの？
　まだ熱を測ってないのに
液晶体温計さえもどかしく
オバサンになってしまった娘の手が
はじめて
お父ちゃんのおでこを覆う

幾日か
化粧水をあてるオバサンの手が
泣き腫らした瞼を冷ましては
おでこに留まって確かめる
　ねぇ、お父ちゃんなの？
鏡に映るショートカットの前髪は
さらりと真っ直ぐに見えて
理不尽なつむじ風に煽られたら最後
誰が撫でても収まらない……
　お父ちゃん、ずうっとここに居たのね

言の葉倶楽部-Ⅱ第8号

2012.3.30発行

◎

共同編集

岩井哲・大原螢

発　　行

言の葉倶楽部刊行会

表紙画／大竹順子

シリーズ作品

KI・MA・GU・RE

◎

事務局

書肆犀（しょしさい）

上山市石堂 7-3-2